
DREAM LAND WAR

アビシニアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D R E A M L A N D W A R

【Nコード】

N 5 7 0 5 A

【作者名】

アビシニアン

【あらすじ】

20世紀が終わり20年もの月日が流れた。誰もが今までと変わらぬ生活が続くのだと思っていた。その中の一人に過ぎない高校生、冴木和真を取り巻く環境が、ある日を境に崩れ落ちていく。友の死、謎の組織同士の対立、そして人知を超えた能力の覚醒…。世界の終焉は、もうすでに足音を立てて近づいている…

序章 - PROLOGUE -

2023年 4月5日

今月から私も中学生。

だからってわけじゃないけど、今日から日記を書こうと思います。勉強も難しくなるだろうし、友達もできるかどうか心配だし。なんだか悩み事ばかりだけど、これを書いたら少しは楽になるかな。

最近なんでだろ、怖い夢ばかり見る。

もう眠るのがイヤなくらい毎日それが続いている。

建物が壊れたり、誰かが死んじやったり…これもストレスってやつなのかな？

でもね、夢の中で私が危ない目にあうと、いつも助けてくれる人がいるの。

男の人で、たぶん高校生くらいかな？

すごくかっこいいんだ。

いつかあんな人が私の前に現れてくれないかな…

1：覚醒 - A W A K I N G -

「ダルい…帰りてえ…」

見飽きた高校の教室。均一に並ぶ机。

その一つで今にも溶けかかっているのが俺、冴木和真【さえきかずま】だ。

今月から高校3年生となった俺は、はっきりとした進路も決まらず、春休みの余韻にひたりながら、毎日をダラダラと過ごしていた。

一部を除いてまわりの友達たちは皆、大学受験や就職などに必死だ。けして俺も樂觀しているわけではないが、かといってその波に混じる気もない。

まあ成るようになるさ…と大きなアクビをして窓の外を眺めた。

「良い天気だな…」

校庭に並べて植えられた桜の木が、きれいに色づいて咲いている。昼休み中ということもあって、その下で昼食をとっている生徒もいた。

「春だねえ…」

毎年同じ周期でこの季節は訪れる。もう二千回以上も繰り返している季節。

俺が何才になっても、俺がいなくなっても当たり前のように繰り返す。

「それが季節つてもんだね…」

窓から入る陽射しを浴びているうちに、俺はゆっくりと眠りについた。

教室中に響き渡るチャイムの音で目が覚め、気づけばもう下校時間になっていた。

「おい和真、遊んで帰るだろ？」

俺の肩を叩くのは、中学からの友達、マサトだ。

「なんだよスポーツ少年、今日は部活ないわけ？」

マサトは中学時代からサッカー部に所属している。運動神経は良いらしい。

「まだ学校始まったばかりだぜ？ たまには休ませろって」

「あーあ、悪い奴だな」

俺はコツンと肘打ちをして、マサトを茶化した。

「はいはい、じゃ渋谷でいいよな？」

と言いながら、マサトはバッグを持って教室のドアへ向かった。

「おいおい、遊びに行くの決定なんだ？」

「とーぜん」

もう教室から出ようとしていたマサトを、追いかけるように席を立った。

渋谷に着いたからといって、特に何をして遊ぶということは決めていない。

ほぼ毎日部活をしているマサトにしてみれば楽しいだろうけど…

俺達はフラフラと街を歩き、手の出ない金額の服を見たり、ゲーセンではしゃいだりしていた。

くだらないことで大笑いして、何も考えずに毎日をご過ごす。

きっとこんな感じでこれから過ごしていくんだろうなと思った。

強い刺激や変化はないだろうけど、忙しいよりはずっと良い。

金が無ければバイトすればいいし、淋しくなったら一緒にバカやれる友がいる。

これから何十年後のことなんて考えても、頭が痛くなるだけだ。

俺達は生きてるんだから、今を楽しまなくてどうする。

「おい、あれってC組のカナじゃねえ？」

マサトの指差す方向を見ると、確かに同じ学校の生徒がいた。彼氏連れで。

「マジかよ…超ショックなんだけど…」

落ち込むマサトの肩をポンポンと叩き、

「女なんて星の数」

と、どこかで聞いたような慰め文句を言ってあげた。

「あーあ、彼女ほしいよな。せつかく高3になったっていうのに」

「そりゃ言えてるね」

彼女か。しばらく縁がないな。

もしこれでカワイイ彼女なんていたら、人生バラ色なんだろうけどな。

とその時、通りかかった路地裏から声が聞こえた気がした。

「…なんだ？」

俺は少し戻って路地裏を覗き見た。暗くて何も見えない。

「なんか声が聞こえた気がしたんだけど…」

…やめる…

俺とマサトは顔を見合わせた。

「おい、ケンカじゃないか？」

マサトの顔がみるみる嬉しそうな表情になってきた。

「ちよつと待て、それは悪いクセだぞ」

「いいじゃんか、ちよつと見てこようぜ」

止める俺を手で押し退けて、マサトは路地裏に入ろうとしている。

「ほんと仕方ない奴だな。ちよつとだけだぞ」

足音を立てないように、ゆっくりと奥に進んでいった。

だが俺は少しずつ暗がり目慣れてきた所で、なぜか異様な不安が胸の中を渦巻いてきた。

「お、おい…なんか変じゃないか？」

俺より一歩先に進んでいるマサトに小声で話しかけた。

「そうか？…あれ、なんだこれ？」

壁に手を当てて進んでいたマサトが、立ち止まって自分の手を見つめた。

「どうした？ガムでもついたのか？」

しばらく手を見つめていたマサトの表情が急に凍りついた。

「おい…これって…血じゃないか…？」

俺の目の前にかざした手の平に、赤黒い液体がこびりついていた。

「う、嘘だろ…？」

その瞬間、路地裏の奥がはつきりと視界に入った。

ポリバケツが倒れ、ゴミが散乱している。

その前に黒服に身を包んだ男が一人立ち尽くし、ゴミの山を見つめている。

山の方に視線を向けると…そこには上半身だけの男が埋もれていた。

「ひっ…！」

俺達は反射的に悲鳴を発していた。

その声に反応したのか、もしくはとくに知っていたのか、黒服の男がゆっくりと俺達の方に身体を向けた。

「ひっ…人殺し…！」

逃げる！と頭ではわかっていても、足が震えて身動きが取れない。

男は俺達をしばらく見つめてみると、ゆっくりと口を開いた。

「ふん…見られたなら…仕方ないな。悪く思うなよ」

一歩ずつ、確実に距離が縮まってくる。

気づけばもう男は、俺達に手が届く場所まで来ていた。

「ゆ…許して…！」

男の手が、ゆっくりと頭上に上げられる。

「うおおおお…！」

俺は無我夢中で男に飛びかかった。

まさか抵抗してくるとは思っていなかったらしく、容易に押し倒すことができた。

「貴様！」

「マサト！逃げろ！」

やはり腕力では叶わないのか、徐々に俺は押し返されてきた。

「わ、わかった！すぐに警察呼んでくるから待ってる！」

振り返って走りだしたマサトに安心した瞬間、突然マサトは音を立てて崩れ落ちた。

「まったく…誰かに見つかるようじゃ三流だと言っただろ」

路地裏の影からもう一人、黒服の男が現れた。

「も、申し訳ありません…」

俺は一気に押し返され、床に転がった。

マサトは…動かない…

「マサ…ト…」

俺は仰向けで倒れているマサトに近づいた。

中学からの一番の友達だった。サッカーが好きだった。これからもずっと一緒にいられると思っていた。

そのマサトは、頭から血を流して、ぴくりとも動かない。

「あ…ああああ…」

何度揺すっても反応してくれない。涙が頬を伝って地面に落ちていく。

「悪いな。見られた以上、お前も死んでもらう」

二人の男が俺を囲んだ。

「…さない…」

「なんだと？」

「てめえら！許さねえ！」

俺はゆっくりと立ち上がり、男たちを睨んだ。

「残念だが、君の実力では期待に答えられそうにない」

男達は鼻で笑い飛ばした。

「殺す！殺してやる！」

マサトを殺した方の男に、全力で飛びかかった。

そして…すべてが始まった…

2：発現 - EXPRESSION -

一体、何がどうなったのかわからない。

ただマサトを殺した男が、血塗れになって壁に貼りついていて。俺の感覚が確かならば、殴りかかったということは憶えている。だが、それだけでこんな風になるだろうか？

茫然と自分の拳を見つめていると、残された男が俺に手刀を振り下ろしてきた。

…当たらない。どれだけ振り回しても当たらない。

俺が…避けているのか？

人並みの運動神経しかない俺が、まさに殺し屋風の男の攻撃を避けている？

「くそ！くそ！」

男の猛攻は止まらない。だが未だ服をかすめることすらできていない。

俺はもう一度、確認の意味も込めて男を殴った。軽く触れたと思った瞬間、男は四肢をあらぬ方向に折り曲げながら、文字通り奥へとふっ飛んでいった。もう動く気配はない。

「なんだ…このチカラは…なんで俺が…？」

視界がぼやけ、頭の中が真っ白だ…目眩がする。

身体中の力が抜けたように、俺は膝から崩れ落ちた。

意識が段々と薄れていく。

「マサ…ト…」

最後の力でマサトに手を伸ばした所で、俺の意識は途切れた。

ここは…どこだ…？

まるで見たこともない街。いや街というには荒れすぎている。そう、これは…廃墟だ。

腐敗物のような臭気に涙が出る程むせかえった。

なんだこの臭いは…

原因はすぐにわかった。

目の前に転がっているのは、全て人間の死体だった。

胃の中のモノが全て逆流してきた。

涙で滲む視界を手で拭くと、ほんの少し先に人影が見えた。

よかった…まだ生きている人がいる…

段々とその姿が見えてきた所で、俺は立ち止まった。

小さな子供が泣いている。その目の前に一人の男が立っていた。

まさか…！

男が手を振り上げた瞬間に俺は叫んだ。

待てよ！まだ小さい子供じゃないか！

男は動きを止め、ゆっくりと俺の方に振り返った。

その顔にはひどく見覚えがあった。いや、毎日見ていたはずだ。

それは…俺の顔だった…

「うわあああ！」

驚きと絶望に叫んだ俺は、さっきの廃墟ではなく、真っ白な部屋のベッドの中にいた。

やや高い位置に取り付けられた窓から、射し込む陽差しが目を強く刺激する。

綺麗に片付けられた部屋。

俺はしばらく茫然と視線を泳がせ、ゆっくりと立ち上がった。

部屋の端にはドア、中央にはやや小さめの丸机、壁際の本棚。

机の上に置かれていたコップの水を、渴いた喉に流し込んだ。

本棚に並べられた本の背表紙を、おもむろに目で追うと、そのいくつか聖書だということに気づいた。

病院ではない…

「ここは教会か？」

確か倒れた場所の近くに教会があったはずだ。

誰かに運び込まれたってことか…じゃあマサトは！？

その時、遠慮がちにゆつくりとドアが開いた。

「あら、もう目が覚めたのですか？」

優しい声。俺は振り返り、声の主と向き合った。

この教会のシスターであろう。

俺より頭一つ小さい身体に修道衣を纏っている。

「もう歩いても平気ですか？まだお休みになられた方が良いのでは……」

心配そうに俺の顔を覗きこむ。

「い、いや……もう大丈夫ですから」

俺は視線を逸らしながら答えた。

シスターの大きな瞳に吸い込まれそうだった。

「そうだ、俺の他に一緒にいた奴がいるんですけど」

マサトは……マサトはいるのか！？

「え？倒れていたのは貴方一人でしたけど」

「そうですか……」

もしかしたら家に帰っているのかもしれない……

そんな期待を込めて、シスターに一言断り、マサトの家に携帯で電話をかけてみようと思った。

「もしもし、冴木ですけどマサト君は？」

「あら、和真くん？久しぶりね」

電話に出たのは、マサトの母親だった。

中学の時にしよっちゅう世話になっていた。

「マサトね、昨日から家に帰ってこないのよ」

「……………」

「私はてっきり和真くんと一緒にいると思ってた」

やっぱりマサトは……あの時に……

できれば夢であって欲しかった。

だが甘い期待とは裏腹に、現実は酷く残酷だった。

「まったく、いつになったら帰ってくるのかしら」

マサトの母は、息子がどうなっているのか知らない。

涙が溢れそうになったが、俺はムリヤリそれを止めていた。

「きつと…そのうち帰ってきますよ」

「そうね、和真くんは親不孝するんじゃないわよ？またいつでも遊びにきなさいね」

携帯を閉じ、俺はしばらく無言で立ち尽くした。

「その方とはお友達だったんですか？」

シスターの声に、頷くことしかできない。

声を出そうものなら、今にも泣きだしそうだった。

俺の感情が治まるまで、シスターは黙って傍にいてくれた。

目が合うと優しく微笑みかけてくれる。

まるで昨日起こった事件が嘘のように、この場所は静かだった。

実はすべて夢で、このまま帰れば何事もなかったように、また同じ毎日が始まるんじゃないか？

家に帰れば親が迎えてくれて、明日になれば学校で友達にも会える。

そう、マサトとも会えるんじゃないか？

「シスター、色々とお世話になりました。俺はもう帰ります」

俺はシスターに一礼して、部屋を出ようとした。

「貴方のチカラ…」

「えっ！？」

ドアに手をかけた俺は、シスターの言葉に驚き振り返った。

「貴方のチカラ…不思議ですね。とても強くて怖いのに、なぜか哀しい」

全てを知っているかのような瞳。彼女は俺のチカラを見ていたのか？

「シスター…なんで…？」

開けかけたドアを閉め、シスターと向き合った。

「私もそうなんです。私にも他の人にはない、特別な能力があるからわかるんです」

「能力…？」

わけがわからない…

こんな優しいようなシスターにも、あんな恐ろしいチカラがあるとい

うのか？

混乱している俺に、シスターは少し笑って答えた。

「私は貴方とは物が違います。人の心の中を見ることが出来るんです」

「人の心を…？」

「そう【アイズワイドシャット】という能力です」

彼女の心を見透かすような瞳は、その能力というやつなのだろうか。

「このチカラは何なんですか？まるで超能力みたいなの…」

ありえない、ずっとTVでそれを取り上げるたびに嘘だと思っていた。

その超能力が今、自分に関わり始めたのだ。

「私にもよくはわかりません。私の場合、生まれつきですから」

俺はつい昨日気づいたばかりだ。それを生まれた時から持っていたのか。

シスターは目をこらして、俺をじっと見ている。

「でも…【ロストソウル】それが貴方の能力らしいですね」

「ロストソウル？」

自分の両手を見た。俺の中にそのロストソウルという能力が宿っている。

人を殺す程の力を持った、凶暴な能力が…

「モノには使い方というものがあります。それを誤りさえしなければ、立派な取り柄になりますよ」

まるで自分に言っているかのように、シスターは語った。

「シスター、色々教えてくれてありがとう」

「いえ、知ってることだけしかお話できませんから」

と言い、軽く会釈した。

「それじゃ俺、もう帰ります。あの…また来てもいいですか？」

その質問にシスターは笑顔で答えた。

「ええ、ぜひ来てください。私の名前は伊藤美里【いとうみさと】です」

「俺は冴木和真です。それじゃまた」
俺は軽やかな気持ちで部屋のドアを閉めた。

3：拉致 - ABDUCTION -

もう辺りはすっかり暗くなっていた。

教会にいる時は気づかなかったが、すでに午後7時を過ぎていたらしい。

街は相変わらず活気に満ちている。

昨日起こったことなど、誰も知らない。

実際に俺だって、この街で何か事件があっても、それを知ろうとするつもりもなかっただろうと思う。

足は自然と昨日の場所に向かっていく。

てっきり警察と野次馬が押し寄せているかと思っていたが、そこには事件など嘘のように何もなかった。

本来なら男が4人倒れていたわけだから、大騒ぎになっているはずだ。

なのに散らかったゴミ以外、何も変わったことなどない。あんなに飛び散った血液さえも…

「どういうことだ…？」

ゴミ袋を蹴飛ばして、辺りを確かめる。

本当に何もなかったんじゃないか…？

そんなことさえ思った時、後ろから声が聞こえた。

「貴様…何者だ？」

俺は驚き、飛び退いた。

後ろを振り返れば、昨日の奴とは違う黒服が3人。

「ここに来るってことは、間違いなく昨日の能力者だろうな？」

知ってる…こいつらは昨日のことを知っているんだ。

そればかりか、俺のチカラのことも。

中央に立っている男を睨んだ…大男だ…

身長は2m近く、横幅も俺の2倍はありそうだ。

「ふん、俺が来ていて良かったな。お前らは下がっている」

大男が俺に歩み寄る。

押されているわけじゃないのに、どんどん後退していた。

「早く能力を解放してみる。あの2人をあんな風に殺したんだ、戦闘タイプか戦闘補助タイプのはずだ」

「な、なんのことだよ？」

こいつ達は能力について詳しいのか？

「あまり佐久間さんをイライラさせるなよ」

後ろで控えていた黒服が俺を煽ってくる。

大男の佐久間に対して後退し続けていた俺は、とうとう壁に背がつくところまで下がってしまった。

「まさか能力の使い方を知らないわけじゃないだろうな？」

佐久間はじりじりと俺の目の前に近づいてくる。

従えていた黒服たちは、ここに邪魔が入らぬよう見張りをしている。「教えてやる、能力は心で強く望んだ時、解放されるのだ」

あたりの空気がひどく淀んだ気がした。

「こうやってな！フルメタルポイント！」

佐久間の右手が一瞬だけ光を放ち、みるみるうちに膨れ上がっていく。

元の状態から2倍…いや3倍はあるように見えた。

ただでさえ太い腕が、今では俺の胴回り以上の大きさになっている。佐久間はその腕で壁を殴りつけた。固いコンクリートの壁が、まるで粘土のようにえぐり取られた。

「さあ貴様も解放してみる。生身の人間がこれをくらったら致命傷になるぞ！」

致命傷どころか、即死してしまいそうだ。

「くそっ！やってやる…ロストソウル！」

シスター美里に教えてもらった俺の能力の名前を、全力で叫んだ。途端にあたりが静まりかえる…まるでこの世界に俺しか存在しないような虚無。

身体中に広がる脱力感、胸の奥に何かがある気配。

身体が…奪われる…

頭が真っ白になったのと同時に、身体の自由が効かなくなった。俺ではない俺が、佐久間に近づいていく。

「なるほど、憑依状態になるのだな…」

佐久間はそう一言呟くと、俺に向かつてその手を振り下ろしてきた。紙一重でその攻撃を避けると、俺の右足が勝手に佐久間に蹴りを入れた。

「ぐあっ!?!」

よほどその蹴りが強力だったのか、大男の佐久間が2mほど後ろに飛び退いた。

「はは、これじゃ部下共に相手が務まるわけではない」

口元に笑みを浮かべながら、蹴られた腹を愛しそうに撫で回した。なおも俺の身体は佐久間に近づいていく。

「小僧、一撃与えたからといって調子に乗るなよ」

佐久間が今度は右足を巨大化させ、空中に飛んだ。

「この攻撃が…避けられるか!」

そう叫びながら、まるで隕石のように俺の頭上から襲いかかってきた。

「…ぬるい」

地面をえぐり取るような攻撃を、楽々避けてしまふ。

「てめえの攻撃は遅せえんだよ。一生かかっても当たらねーぜ?」挑発的に罵倒する俺を、かすかに笑いながら佐久間は睨みつけた。

「何がおかしい?」

佐久間は立ち上がり、俺に振り返った。

「小僧、戦いとは一對一の喧嘩じゃないんだぞ?」

気づいた時には遅かった。

相手にしていなかった黒服二人が、視界の外から俺に何かを吹きつけた。

頭の中が真っ白になる…憑依とは全く別の眠気が襲ってきた。

「少し眠っていてもらう」

高らかに笑う佐久間の声が少しずつ遠くなっていき、俺の意識はゆっくりと失われていった…

4：牢獄 - PRISON -

俺が目を覚ましたのは、けして真っ白な部屋ではなく逆に真っ黒な石造りの、薄暗い部屋だった。

いや、部屋というにはあまりにも無骨すぎる。

窓もない、土臭い四角の空間としか言いようがない。

つまりここは牢獄だ。

「…寝起き最悪」

そう呟いた時、牢屋の隅から微かな笑い声が聞こえてきた。

「誰だ!？」

ゆらりと人影が動いて、立ち上がった。

そのまま俺の方に歩いてくるので、思わず俺は全身で警戒する。

「失礼、そう身構えないでもいい。私は君と同じく捕まった者だ」

少しずつ相手の姿が見えてくる。

最初に気づいたのは、長く美しい純粋な金髪。

真っ白な肌、整った彫りの深い顔、日本人じゃない。

「はじめまして、私はマイケル・カーティス。わけあってこの組織に捕まっているところです」

右手を腹に当て、深くお辞儀をする。

「あ…ども、冴木和真といいます…」

あまりにも礼儀正しいその態度に、どうも恐縮してしまった。

「察するところ、ここにいるということは君も能力者だね？」

身体がビクツと震える。その反応にカーティスはやはり…と思ったようだ。

「私も能力者としてこの組織…真中光弘【まなかみつひろ】の組織に捕らえられています」

真中光弘…どうやらその男が俺をさらった組織のボスらしい。

「一体なんなんすか？人を殺して誘拐して…普通じゃないっすよ」

俺は誰にでもなく、吐き捨てるように言った。

「彼は能力者を集め、この世界に革命をもたらそうとしている」
革命…聞いたことはあるが、実際にどういうモノなのかなんて、一介の高校生に知る由もない。

ただ、その渦の中に自分も巻き込まれてしまったようだ。

しばらく無言でいると、カーティスが言った。

「さて、頼もしい仲間もできたことですし、そろそろここを出ましようか？」

俺は咄嗟にカーティスの顔を見た。

「どうやって？まさか鍵を持つてるとか言いませんよね？」

カーティスはゆっくりと首を横に振った。

「いえいえ、鍵は持つてません。持つてきてもらうのです」

この人は何を言ってるのだろうか…そんなことを思っていると、カーティスは牢屋の外を見つめた。

「…今、大声を出すと、鍵を持つている監守が来る可能性は…」
そしてゆっくりと目を閉じる。

「…82%」

そう呟いた直後、カーティスは大声で叫んだ。

「ちょ、ちよつとカーティスさん!？」

俺を見つめ、少し笑いながら言う。

「監守が牢に近づいたら、その瞬間に君の能力で倒してください」
慌てふためいている俺を置き去りに、本当に監守が駆けつけた。

「おい!うるさいぞ!静かにしろ!」

ちらつとカーティスを伺うと、彼は俺にウインクで合図を送ってきた。

…仕方がない…

「…ロストソウル」

瞬間、俺は牢の間を抜けて監守に拳を叩き込んだ。

そして宙を舞う銀色の輝きが、チャリンという音を立ててカーティスの足元に落ちた。

俺は呆然と彼の顔、銀色の鍵を交互に見つめている。

「言っただでしょ？これが私の能力です」

得意げに話しながら、足元に落ちた鍵を拾った。

「いや、全然意味がわからないんですけど…」

カーティスは手際よく牢の鍵を開け、外に出た。

俺も続いて後を追う。

「何をどうすればこうなる、ということはある程度決まっているモノです。それを引き起こすのは偶然の重なりであり、まさに神の落とし物」

前を歩くカーティスがふいに振り返った。

「私は物事の確立を読むことができる。名前は【エンジェルダスト】です」

歩く…と思ったら突然走り出す…

そんな繰り返しを数回続けているうちに、何となくわかってきた。

「あれスか？敵が通る確立を読んでるってことなんですか？」

彼は前を向きながら頭を縦に揺らした。

「でも、さっきは俺が殴ったけど、もし戦えるような能力じゃなかったらどうしたんですか？」

「君が戦闘系の能力である確立が、86%だったからですよ」

…なんかつまらない

当然の如く、しばらくすると建物内が騒がしくなってきた。

アイツも…佐久間も俺達を探しているのだろうか…

佐久間との戦闘。あの時は何故か自分の意識があるにもかかわらず、身体の自由は完全に利かなかった。

それに比べ、さっき監守を殴り飛ばしたのは、自分の意志だ。

カーティスや佐久間は自分の能力を良く理解しているのだろう。

そう思うと、ロストソウル能力は未だ意味がわからない部分がある。

これがいつか取り返しにつかないことにならなければいいが…そう、

あの夢の中で見た景色のように…

そんなことを考えていると、突然カーティスが立ち止まった。

「どうしたんですか？」

彼の柔和な顔が少しばかり堅くなっている。

何となく想像がついた。敵に見つかる可能性が著しく高いのだ。

「敵が…近いんですか？」

「ええ…それもとびきりのね…」

俺にもわかった。この重苦しい異質な空気。

それは目の前の曲がり角から放たれている。

その空気が影を作り、やがて俺達の目の前に立ちはだかった。

「ふん、どうせすぐに逃げ出すと思っていたがな」

佐久間だ…

「だが、まさかその小僧を連れてとは。協力者になるとでも？」

カーティスは静かに笑いながら言った。

「いえいえ、ただ彼の能力に興味があっただけですよ。それに旅は道連れ…と言うじゃないですか」

巨大な佐久間を前にしても、彼の態度は変わらない。

一瞬シンとした空気が流れたあと、佐久間が通路の壁を殴りつけた。初めて会った時のように、石造りの壁が簡単にえぐり取られる。

「さて…こっちは準備万端だ。お前の能力を見せてみる…」

明らかにカーティスに対し、敵意を示している。

だがそんな態度を前に、彼は俺に振り返った。

「こういう力任せな勝負は私には向いていません。お願いしますね」
「ハア!?…」と言い終わる前に、彼は佐久間の横をすり抜け、走り去った。

…おいおい、マヂかよ…

「奴は他に任せるとしよう…まずは小僧、お前からだな…」

佐久間は戦闘の構えをとって俺に向き直った。

最初の戦闘を思い出す。あの時は多少なりとも分があったはずだ。今は完全に一対一、やるしかない！

「ロストソウル！」

勝負は一瞬、この狭い通路なら奴の巨体では動きづらいはず。

一点突破で貫く！

…鋭い音が響いた…

貫くはずの俺の右手が、佐久間の腹で止まっている。

まるで硬いモノを殴りつけたように。

「…嘘だろ…？」

口に出した瞬間、俺は佐久間に殴り飛ばされた。

「フルメタルポイントで強化できる部分が、腕や足だけだと思うなよ」

佐久間は任意で自分の身体の一部を強化できるのだ。

つまり守りに撤することも可能…攻防一体の要塞を思い浮べた。

勝てるはずない…まず俺と佐久間じゃ戦闘の経験が違いすぎる。

全身を絶望感が襲った。その時、また以前のように身体が重くなる。

俺はいつのまにか笑い出していた。

「どうした？絶望に気でも違ったのか？」

ニヤリと笑う佐久間。

「攻防一体、いやあ…素晴らしいね」

パンパンッと、デニムについた埃を払う。

「でもさ、なんで今殴られた時に致命傷を受けなかったんだろうな？」

そうだ…確におかしい。壁を吹き飛ばす程の力なら、いくら能力を使っていたとしても、俺の身体なんて粉々だろう。

「つまり強化は常に一部。瞬時に切り替えはできないってことだ」

佐久間の顔が、みるみる怒りのこもった表情に変わっていく。

「それがわかったからどうした？俺の力があれば貴様を殴り殺すことだってできるだろう」

今度は左手に集中させている。守りに入るつもりだ。

「つまり…こういうのはどーかなって思ってたさ」

言うや否や、俺は今まで体感したことのないスピードで走り寄った。

何度も何度も繰り出す、突きや蹴り。

だが、俺の怒濤のラッシュも、佐久間は左手だけで全て防御する。

「無駄だ！貴様と俺では戦いの経験が違う！」

そう、佐久間の戦闘能力からすれば、一介の高校生の打撃など物ともせずには防御し続けられるだろう。

…だが…

益々俺のスピードが上がっていく。秒刻みに身体が加速していくようだ。

佐久間が押され始めている…と思った瞬間、俺の突きと蹴りが、コンマ1秒の世界に佐久間の全身に打ち付けられるのを感じた。

「…そんな…バカな…」

最後の声を上げ、大男は血を吐きながら170cm程度の高校生の前に崩れ落ちた。

俺は…佐久間を倒した…

フラフラとした足取りで、真っ直ぐ通路を進む。

身体中に激痛が走って、うまく歩けない。

佐久間を倒したあと、すぐに身体は自分の管理下になったが、殴られたのが効いたように身体が動かない。

しばらく歩いていると、壁にもたれかかっている人を見つけた。

カーティスだ。

「おかえりなさい。ひどく疲れているようですね？」

そりゃああなたが…と言おうとしたがやめた。

「彼は幾度もの戦争を経験した男。いわば戦闘のプロでした」

佐久間のことだろう。

「そんな男が敗れる程のチカラを持つ君に、すごく興味があります」
不敵に笑いながら歩き始めるカーティス。

いつのまにか出口が近いらしく、外の明かりが射し込んできている。

「この世界はこれから一つになろうとしています」

歩きながらカーティスが呟いた。

意識が朦朧としてきた今、彼の声が頭に響くように聞こえている。

「一つになった世界には秩序があり、平和に溢れていることでしょう」

世界が…一つになる…

「正しき者が笑い、悪が淘汰される時代：誰もが喜びの歌をうたい、輝かしい明日への思いを馳せる…」

俺は静かに聞いていた。

「現実の世界を考えてみてください。悪が蔓延り、心優しき者が涙を流す。疑いあい、奪い合い、殺しあう：自分以外の者は信じることもできない。そんな世界のどこに光があるというのでしょうか？私はこの世界に光を、希望をもたらしたいのです…」

カーティスの姿が光に包まれる。それはきつと出口の光が射し込んでいるのであろう。

だが今の俺には、それがすごく神々しく思えた。

「我々の望みは世界統一。その邪魔をするのが真中の組織なのです。君のチカラは我々を守る盾となり、敵を討つ剣となるでしょう。今、私は君を必要としています。いつかきつと手を貸してください」

そして、俺の意識は途切れた

5：警告 - WARNING -

光

光の中を金髪の少女が一人で踊っている。

鼻歌は俺の心を踊らせ、自然と笑みがこぼれていた。

俺の姿に気づいた少女が、嬉しそうな表情を浮かべ走り寄ってくる。

『おかえりなさい、お兄ちゃん。ずーっと待ってたんだよ』

「ああ、ごめんね。色々と忙しくて」

俺は…この少女のことを知っている。

それは遠い昔からのようでもあり、つい最近のような気もした。

『うん、知ってる。大変だったんだよね』

「そう…大変だった」

でも、この少女といると心から癒される自分がいる。

『大きなお兄さんも、キレイなお兄さんも、お兄ちゃんと一緒にいてほしいって思ってるんだよ』

「そう…なのかな？」

佐久間は敵意を燃やしていた気がするけど。

『そうだよ。お兄ちゃんはどうちの人が多い？』

「俺は…カーティスさんかな。結局佐久間とは戦ったし、カーティスさんの言う通り、世界が平和になれば良いかなって」

少女は少し哀しそうな顔をした。

『でもね、お兄ちゃん。平和っていうのは、どんなことだと思う？』

「え…それは…なんだかうまく言えないな」

そっぴいえば平和というものが具体的にどういったものなのかなんて考えたことなかった。

『ふふふ、それじゃ今度会う時までの宿題だね』

「…そうだね、ちよつと考えてみるよ」

『きつとお兄ちゃんの周りは、これから色々なことが起こるよ。でもそれは哀しいことの方が多いと思うんだ』

「そうなんだ、ちょっと怖いかな…」

少女は笑った。

『大丈夫だよ、お兄ちゃんが困った時は、アリスが守ってあげるから』

少女、アリスは小さな手で俺の手を握った。

『未来はずっと、光で溢れているよ…』

「いたたたた！」

身体中が痛い…俺はあのあと家に帰り、母親の手痛い治療を受けていた。

「まったく…身体中が筋肉痛じゃないの…何日も家に帰らないで、いったい何やってたの？」

俺の背中に湿布を貼りながら母さんが聞いてくる。

まさか言えるはずないよな…てゆーか言っても信じないだろうし。

「マサト君はまだ帰ってないらしいわよ？一緒にいるものだとばかり思っていたけど」

マサトは殺された…それこそ言えやしない。

俺は知らないフリをしていた。だがいつか、わかってしまう日が来るだろう。

俺はその時、どんな顔をすればいいんだ…

「まあ和真ももう18だもんね、母さんは見守ってるからね」

そう言った母さんの顔が、なぜかどこことなく淋しそうだった。

「悪いけど、また出かけるよ。会わなきゃいけない人がいるんだ」

一通り治療を終えると、俺は立ち上がって玄関に向かった。

「わかってるよ。和真は父さんの子だから…」

俺の後ろに続く母さんが、うつすらと笑顔を浮かべながら言った。

「え、何？」

俺の親父、冴木京介【さえききょうすけ】は、俺が小さい頃に死んだ。

葬式もやった気がするが、正確にいつのことだったかは憶えていな

い。

「父さんも和真のことをいつも見守ってるよ。だから無茶しないでね」

心配そうに見送る母さんに、俺は笑いかけた。

「大丈夫だよ。危ないことをする気はないし」

できればそうなって欲しくない。今まで通りの生活を取り戻したい。そのために俺は、美里さんに会いに行く。

玄関を開け、教会に向けて勢いよく走りだした。

「…京介…あの子を守ってください…」

「和真さん、貴方がここに來た理由はわかります」

物音一つしない静かな聖堂、美里さんは俺の前を歩いている。そつえば、今までこんな風に教会を見渡すこともなかった。

「それは能力を失う方法…ですね？」

俺は静かに頷いた。

このままこの能力を使い続ければ、間違いなく狙われるだろう。ならば能力を失えば、俺を狙う理由はなくなる。

「残念ですが…不可能です。少なくとも私にはわかりません」

俺の思惑は、いとも簡単に崩れてしまった。

「もし能力を消すことができるなら、私も最初からそうしてしました…」

そう言つて美里さんは遠くを見つめた。酷く哀しい眼差しで。

「美里さんも…その…やっぱり能力でつらい想いをしたことがあるんですか？」

余計なことを…！

そんなことを聞けば余計悲しませるのは目を見えてるはずなのに。と言つた後に後悔した。

失敗した…という顔をしている俺に、美里さんは笑いながら口を開いた。

「他人の心が見えるというのは…良いことばかりじゃないんですよ」

そう言うと、美里さんは視線を窓の外に向けた。

正直、話を聞くまでの俺は心が見えるという能力がうらやましかった。

他人の心が見えるなら、相手がどう思っているのかわかるし嘘だって見抜ける。

「私はとても貧しい家庭で育ちました。父も母も毎日のように仕事で、家にいることなんて滅多になかったんですよ」

夕日が美里さんの顔を照らしている。

「それでも両親の暖かさは、この能力を使わなくても伝わりました。私をとっても愛してくれてるって…でも成長して街に出てから気づいたんです。多くの人々は心の中に闇を背負っているということに」何も言えなかった。

俺に何かやましい気持ちがあるわけじゃない。

だが美里さんは何十人、何百人の心の中を見せ付けられてきたのだろう。

その中には怒り、憎しみ、それらを含む負の感情だつてきつと数えきれない程。

今まではうらやましいと思っていたが、もし俺だったら耐えられないかもしれない…。

「でも、それでも私を救ってくれたのは…ここです」

美里さんは立ち上がり、大きなマリア像に祈りを捧げた。

「私はここが好きです…ここには汚れも闇もありませんから」

振り返りながら笑って見せた。やはり酷く哀しそうな顔で…

「そして気づいたんです。この世には悪い人もいるけれど、それと同じ…もしくはそれ以上に良い人たちもいるって…」

教会から出た俺は、ゆっくりとした足取りで家に向かっていった。

能力は消せない…

その事実が俺に重くのしかかる…

なぜ俺に…いや、その前になぜあの時に路地裏になんか行っただ…

ふと周りを見る。

たくさんの人々が忙しそうに、あるいは楽しそうに通り過ぎていく。きつとこいつらは何も知らないんだ。

この街で何が起こっているか、どんな奴らが潜んでいるか、もちろん恐ろしい能力のことだって。

…今の俺を美里さんが見たらどう思うだろう。
きつと哀しい顔をするに決まっている。

憎悪、後悔…今の俺はまさにそれらの塊だ。

いつもはできるだけ関わらないようにしている、柄の悪い奴らだつてもう怖くなんかない。

だって怖いのは…自分自身だからだ…

ふと気づいたんだ。

自分を守るためとはいえ、この数日間で一体何人の人間を殺したんだ？

この手で、足で、ただの高校生だった俺が。

途端に自分だけが取り残されたような気になった。

知ってしまったから、この世界の闇の部分。

「ちくしょう！」

誰にでもなく叫んだ。

通り過ぎる人たちが怪訝そうな顔で見ている。

そうだ、俺はどんな理由であれ…人殺しだ…

「くくく、勇ましいことだなあ…」

いきなりの背後からの声に、思わず飛び退いた。

背後にいたのはコートに身を包んだ細身の男、目だけがギラついていた。

「だ、誰だ！？」

俺は街中だというのも構わず、男に対して敵意を剥き出しに叫んだ。

「こんな奴がああ佐久間をねえ…わからねえもんだ」

ギラついた目で俺のことをジロジロ見てくる。

佐久間を知っているということは、当然関係者だ。

能力者かもしれない。

俺の剥き出しになった敵意がやられる前にやってしまえ…と叫んでいる。

しかし男は突然、戦う気のない素振りを見せた。

「やめな、街中だぜ？こんな人目がつく場所じゃ戦えねえよ」

と言いながら男は煙草に火をつけた。

「…何の用だ？佐久間の仇討ちか？」

俺はできるだけ気持ちいを落ち着けて聞いた。

「仇討ち？そんなつもりはねえよ。ただある御方からの使いで来ただけだ」

てつきりそうだと思い込んでいた俺は、かなり拍子抜けした。

「ある御方？」

まさか組織のボスだと言っていた真中という奴か？

「バカが、言えるわけねえだろ。とにかくその御方がお前を目障りに思ってるんだ。強さうんぬんじゃなく、どこにも属さないフリーな状況をな」

吐き捨てるように言った。

「まあ警告つてやつだ。俺らの組織がどういう物かつてのは入ってからじゃないと言えねえが、うちのトップもお前のチカラを望んでいる。俺らと一緒に世界を変える気はねえか？」

ニヤニヤ笑いながら聞いてくる男に、俺はそっぽを向いて拒否した。「そうかい、まあ明日までに考えな。もし拒んだ場合は始末していいと許しが出る。どっちかというところを期待してるぜ…」

男は高らかに笑いながら去って行った。

何なんだ、組織に入らないなら始末するだと？

冗談じゃない…！

しばらく憎々しげに男の背中を睨みつけていた。

男の姿が見えなくなった所で、俺の方に走り寄ってくる男が一人。見た感じ若者…その男が突然俺の襟首を掴まえた。

「おい！さっきの男はどこ行った！？」

高校生：俺と同年くらいの男だ。

長い茶色の髪を振り乱し、怒りのこもった形相で俺を睨みつけている。

「知らねーよ！何なんだよお前は！」

俺は掴んでいる手を乱暴に振りほどいた。

くそっ、と呟き辺りを見回す高校生。

さすがにこの人込みでは、もう見つからないだろう。

「さっきの奴は、お前の仲間か？」

彼は一呼吸置いてから、俺に聞いてきた。

「んなわけないだろ。どう見たらそうなるんだよ」

すると彼はバツの悪そうな顔で謝った。

「そうか…悪かった。ずっと探してた奴を見つけたんで、頭に血が上り過ぎたみたいだ。」

さっきの男に恨みがある。そう言っただけで彼は遠くを睨みつけた。

「何かされたのか？俺もさっき勧誘…ってか脅されたんだけど」

その言葉を聞くと、彼は驚いた表情で向き直った。

「なんだと！？それじゃお前も能力者…！？」

驚いた…まだ能力者はたくさんいるだろうと思っていたが、まさか数日の間にこんなにも出会うとは…

俺は数日前に能力に目醒めたこと、何度かこの能力を使い敵と戦ったことを簡単に話した。

「そうか…俺は周防隼人【すぼうはやと】一年前に能力が目醒めた…どうやら歳は俺と同じ18だが、学校には行っていないらしい。」

こんなチカラに目醒めて、追ってる奴もいるのに学校になんか行けるかよ…と少し笑いながら言った。

「そっかいや脅されたって言ってたな。また来るとか、そんなこと言ってたか？」

明日返事を聞きにくる…ということ伝えたと、周防の顔が徐々に厳しい表情になった。

「まずいな…とにかく俺をお前の家に連れて行ってくれ。奴は危険

な男だ：間違いなく戦闘になると思う」

最初俺は拒んだが、周防が今にも土下座しそうな雰囲気なので、渋々承知した。

俺は益々戦いの場に身を置いていくのかもしれない…

二人並んで歩く中、そんなことを思っていた。

2023年 4月8日

いつも同じ夢ばかり見ているのに、今日は珍しく違う夢を見ました。もしかしたら夢の続きなのかな？

このままドラマみたいに続けばいいのにな（笑）

なんて、そんな夢みたいなことあるわけないか。

夢だけど。

いつも私を守ってくれるあの人。

なぜか知らないけど、あの人が泣いていました。

あんなに強いあの人泣いているんだから、よっぽど哀しいことがあったんだよね…

私はあの人を慰められるのかな？

哀しそうなあの子の顔を見ると、私まで哀しくなってきました。

6：虐殺 - SLANGHTER -

月が俺達を照らしている。

隣りを歩く周防は何を考えているのだろうか。

全ては語らなかつたが、さっきの細身の男【高村一樹^{たかむらかずき}】に恨みがあると云っていた。

横目で見るその顔は、何か決意を固めたような真剣な面持ちだった。

「なあ周防、俺たちの能力って何なんだろうな…」

俺は夜空を見上げながら呟いた。

「さあ…な…」

周防はそつけなく返す。

「俺思うんだ。この能力さえなければ、今迄どおり平凡に暮らせたんじゃないかって。友達も失わず、ましてや殺し合いなんて無縁の生活にさ」

お互い顔を合わさず、正面を見ながら話していた。

「確かにな。でもお前はそれで満足なのか？その平凡な暮らしってやつで」

何を言っているんだ？

満足に決まっているじゃないか。

何事もなく笑って暮らせるならそれが一番良いに決まっている。

「能力があるせいかどうかはわからないが、結局の所どこかで形を変えて争いは起き、お前の言う大切なモノも失われていったんじゃないか？」

周防は俺に向き直った。

「俺には他の人に持てないチカラがある。それだけで目的を果たせる。俺は能力に感謝してるよ」

そう言いながらまた歩き始めた。

周防の目的…それは高村と戦い、殺し合うことなのだろうか？

「俺は…強くなりたかつたんだ…」

小さな叫びが短い残響を残し、夜空に吸い込まれた…

しばらく歩くと、目の前に見慣れた人物を見つけた。

「あれ、美里さん？」

パツと顔を上げ、美里さんは俺たちに歩み寄る。

「よかった、もう見つからないかと思っていたところだったんですよ」

走って探していたのだろう、呼吸が乱れている。

「お友達ですか？」

周防を見て、小さく笑顔を作った。

「こいつとはさっき知り合ったばかりですよ」

同じ年頃だから、友達に見えてもムリないだろう。

「貴方：貴方も能力者なんですね？」

予想通りというか、美里さんは一目見て能力者であると気づいた。

それと、きつと胸に秘める決意も見えてしまったであろう。

周防も一瞬うろたえたが、読心能力だとわかると納得したようだ。今、高村の言うフリーの能力者が三人集まっている。

こんな偶然であるか…なんて思いつつ、なぜか心強くもあった。

「実は和真さん、貴方の中に不穏な気配を感じて追いかけてきたんです」

美里さんは俺を真つすぐに見ながら言った。

「もしかしたら貴方の能力に原因があるのかもしれませんが。一度その肉体的疲労をお医者さまに相談してみては…と思ひまして」

確かに能力を使うたびに身体に異常を覚える。

それは戦闘のダメージや、慣れない能力の負荷かと思っていたのだが、もしそうだとしたなら美里さんはどうなる？

ほぼ自動的に相手の心を見てしまう能力に負荷があったとしたら、きつとつくの昔に倒れてしまっただろう。

「なに、冴木有能力ってそんなにヤバいわけ？」

と周防が笑っていたのだが、突然震えだした美里さんに気づいて、

俺たちは身体を固くした。

「み、美里さん？」

酷く怯えている。

彼女は頭を抱え、しゃがみこんだ。

「あ…悪意が流れてくる…頭が痛い…」

崩れかかるところを咄嗟に抱き留める。

この震え方は尋常じゃない…何かが見えたんだ？

「今までこんなことなかった…離れてる人の心を見るなんて…」

俺の腕にしがみつきながら美里さんが向いたのは…俺の家がある方角だった。

「え…俺の家？」

マズい！と叫び、周防がその方角に走り出す。

俺はわけがわからなくなっていた。約束は明日のはずだ、それなのに何故？

「私は大丈夫ですから…早く追いかけてください！」

一瞬、躊躇したが美里さんの真剣な目に気づき、全力で周防を追いかけていた。

いつもはさほど距離を感じない家までの道がやけに遠く感じる。

周防はもう着いているだろうか？

美里さんの言う悪意とは？

見えたと言う俺の不穏な部分とは？

何もかもわからない。自分のことでさえも。

それでも今は、全力で走ることが俺のすべきことのように思える。

だからとにかく走った。

すぐに息が上がる。

もっと真面目に体育の授業を受けていればよかった。

立ち並ぶ家々を抜け、十字路を曲がり、そして周防の背中を見つけた。

「す…周防…！」

「来るな！」

周防が叫ぶ。

よく見れば周防の目の前に人影がある。

母さんだ、俺の母さんが正面に立っている。

「母さん？どうしたの？」

やけにニコニコしている。不自然なくらいに。

俺が何気なく母さんに歩み寄ろうとしたのを、周防が腕で制止する。

「な…なんだよ？俺の母親だぞ？」

周防が首を横に振る。

「奴は…高村だ」

何を言っているんだ？どう見ても母さんじゃないか。

「変なこと言う子ね。和真、こっちへいらっしやい」

母さんが手招きをする。

だが周防の腕が、より力を込めて俺をしつかりと引き止めていた。

「あの時と同じだな…高村。俺の妹を殺した時と！」

その言葉を聞いた母さんの顔が一瞬固まり、小さく笑いだした。

「そうかい、あの時のガキか…まだ生きてたとはな」

一度目を閉じ、再び開いたその目には明らかに狂気を宿していた。

母さん…？

俺は母さんと周防の顔を交互に見ていた。

「冴木…高村は他人の身体の中に侵入し、乗っ取る能力なんだ…」

乗っ取る…？

それじゃ…今の母さんは…

「一年前、俺の妹もその能力で殺された…俺のたった一人の家族を！」

母さんが一際大きく笑う。

「ひやはは！そうさ！これが俺の【パラサイト】よ」

やっとな俺にも飲み込めた。

高村は俺より先に家に向かい、母さんに会った。

そして能力による乗っ取りが悪意となり、美里さんのアイズワイド

シャツで拾ってしまったんだ。

「高村！約束は明日だろう！？母さんから早く出ていけ！」

許せない…母さんは俺のたった一人の家族なのに…

「それはできないねえ…こいつは人質だからな」

酷く不快だ…こんな奴らと手を組むなんて…だが…

「…取り引きするつもりなのか？」

母さんを返してほしければ仲間に入れということか。

「物分かりがいいじゃないか。まあそういうことだ」

正直絶対にイヤだ…だがここはこのまま仲間になるしかないのか…

俺は震えていた。

恐怖なんかではなく、はつきりとした怒りと殺意で。

「嫌だっというなら言ってもいいんだぜ？」

高村が後ろ手に隠していた包丁を取り出し、母さんの首元に近付ける。

「ま、待て！」

殺される…このままだと母さんは確実に…！

額から滲み出る汗、ノドもからからに渴いている。

TVドラマでよく人質を盾にされるシーンをよく見るが、実際だとこんなに苦しいとは思わなかった。

もう限界だ…いつそ仲間になってしまえば…

そう思った時、周防が含み笑いを洩らした。

「あいかわらずだな高村。その手口でまだやってるなんて思わなかったよ」

周防の周りに異質な空気が集まる。まさか！？

「グレイデーター！」

周防が叫んだと思うと、母さんの足元の道路が盛り上がり、母さんを仰向けに転倒させた。

そしてその盛り上がった部分が、ほんの一瞬で母さんの手足に乗り、固まった。

まるで手枷と足枷をつけられたように。

「なっ！？てめえ！」

もうこうなつては身動きを取れないのは一目瞭然だ。

高村の抵抗も虚しく、手足をじたばたさせてもがいている。

「高村：所詮お前は自分より弱い者に憑くことしかできない卑怯者だ。その罪をここで清算しようぜ」

そして周防は俺を見て言う…殺せ…と。

「バ、バ力言うな！いくら高村が憑いてるからといっても、身体は母さんだぞ！まずは元に戻さないと！」

「そうよ和真！私を早く助けて！」

母さんが叫ぶ。

言ったのは高村だ、それはわかっている…わかっているのに心が揺れる。

「冴木、気持ちわかる。俺の妹に憑いた時もそうだったからな」
周防が俺の目を真つすぐに見つめる。

「だけどな、もう遅いんだよ！高村に憑かれたら…もう死んでるんだよ！」

え…と声を洩らした。

母さんが死んでる…？

だって今、そこにいるじゃないか？

昼間はあるに元気だったじゃないか？

俺が昼間に家を出て教会に向かい、その間に高村に殺されて身体を奪われて…

…ああ、そうか…

すべてがわかった時、俺は目眩を起こし、地面に倒れかけた。

その俺を、いつから追い付いていたのか美里さんが抱き留めてくれる。

暖かくて…まるで母さんのようだった…

俺は母さんにまだ何もしてあげてない。

いつだって心配かけてばかりだった。

最後の言葉だって何もなかったのに…。

「冴木…そのまま眠れ。幕は俺が下ろす」

周防の声がとても遠くから聞こえる。

その後、続く地響きと断末魔の声を子守歌に、俺は眠りに落ちた。

もうこの世にはいない、母さんの夢を見ながら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5705a/>

DREAM LAND WAR

2010年12月14日21時44分発行